

## 第I部 要約

### (序章)

導入として、日常の暮らしや生活環境における願望、不満、不安等の一例を、仮想の人物の視点から描写した。

### (第1章)

第1章では、日常生活における下記の3局面から、意識調査等を基に、人が普段の暮らしやそれを取り巻く生活環境について感じていることを分析した。その結果、人のニーズは、生活の危機に関するものからゆとり・ゆかしさを求めるものまで、幅広く広がっていることがうかがえた。

第1節「地域に住まう」については、都市・地方とも、日常生活関連や安全・安心など基礎的な生活環境が特に重要と考えられている一方で、満足度は利便性の面などで地方が低い。住居本体に対しては、バリアフリー化など住宅性能の向上が求められるとともに、住む場所の確保自体が課題となる場面もある。取り巻く環境については、緑や水辺空間を確保したり、安全・安心を確保したりする必要がある。

第2節「社会で活動する」については、日常の用事を済ませる上で、利便性ととも付加的な“ゆかしさ”が求められている。働くことについては、厳しい雇用状況やワーク・ライフ・バランスの確保が難しい状況が改めて明らかになった。余暇については、気分転換が求められているが、経済的な事情等が阻害要因となっている。総じて、利便性、雇用、余暇をゆかしむ場所といった事項で地方が相対的に不利となっている。

第3節「場所を移動する」については、地方では、公共交通の衰退の中で移動手段の持続的な確保が課題である。他方、都市では、公共交通の混雑緩和等が依然必要であり、道路の渋滞緩和等も引き続き必要である。また、安全・安心やバリアフリー化に対する意識も高い。

これらを通して、日常の生活の利便に関する満足度が特に地方で低い状況が示されているが、これに対して、従来の取組みから進んで、まちの構造と交通機能を一体的にとらえて模索する必要と、それを可能にする新しい取組みについて触れた。

### (第2章)

第1章で見た様々なニーズに対して、国土交通行政は、ハードとソフトを連携させた多彩なツールで対応していかなければならない。第2章では、今後の取組みについて、その方向性と主要な施策を5つの視点から紹介した。

第1節「暮らしにおける安全・安心の確保」と第2節「暮らしにおけるセーフティネット機能の充実」では、暮らしの一番の基礎である安全・安心の確保、また、住む場所や日々の移動など基本的な機能の確保といった、暮らしの根幹を支えるための施策を記述した。

第3節「日々の生活の心地良さ向上」と第4節「多様なライフスタイルを支える基盤の形成」では、生活の中の様々な活動で求められる利便性とゆとり・ゆかしさ、また、様々なライフスタイルが選択できるような環境といった、日々の生活をよりよく、さらに暮らしの質を高めるための施策を記述した。

最後に、第5節「広域的・グローバルな展開への対応をサポート」では、生活を支える繋がりを創出・維持強化するための施策を記述した。

## 序章

## これまでの私たちの暮らし

私たちの日常のありふれた暮らしや生活環境における願望、不満、不安等の一例を、生活風景を具体的に想定しながら振り返ってみる。ここでは、ライフステージやおかれた環境の異なる仮想の人物の声に耳を傾けて、個別具体的な事例に沿って、暮らしを見つめ直す。

### 【A子さん 首都圏在住の33歳。会社勤め、夫と子供と3人暮らし】

- ・仕事と子育ての両方って、想像してたより厳しい。夫は残業もあるし通勤が長いから、全然戦力にならない。
- ・夫は出張が多いけど、空港までの行き来だけで旅行だってこぼしている。
- ・私もノロノロの通勤電車で体力を消耗しちゃう。もっと速く楽ちんになってくれればいいのに。
- ・近くでくつろげる場所があるといいのに、この辺は家ばかりごちゃごちゃ建っていて、うるおいが感じられない。
- ・周囲は建物が建て込んでいて、大きな地震でもあったらどうなるか、不安…。
- ・家の近くの道路は、歩道もないし電柱があって、子供と一緒にだと歩きにくくて困っちゃう。
- ・ママチャリで少し遠出したいけど、子供を乗せて車すれすれを走る人を見ていると、見ているこっちがドキドキする。
- ・もっと便利で環境のいいところに住めればいいけど、給料も抑えられたままで減らされるかもしれない中で、ローンを組むのは怖い。
- ・2人目も欲しいけど、これじゃ無理かな。でも、弟は「超氷河期」世代で、給料も全然安みたいだし、もっと大変そう。結婚して子供を持つことなんてできるのかな。住む場所だってあるのかな。

### 【B夫さん 地方都市在住の60歳】

- ・この町に越えてきて20年。若い人も少なくなって、職場もどんどん減って、まちに活気がなくなった気がする。
- ・にぎわいがほしいけれど、人が見に来るようなぱっとしたものは見当たらない。
- ・自分の故郷の、虫取りや魚採りをした山や川を思い出すけど、この辺にはないな。生活排水で水も汚いし。うんと田舎に行かないとだめなのかなあ。
- ・お店も大分減ったので、欲しいものが近くで買えない。車でスーパーに行けば一通りそろうけど。
- ・そういえば町内会とかさぼってきたけど、退職を機に少しは地域の活動でもしたいなあ。

### 【C子さん 過疎地域在住の82歳】

- ・年のせいか、家の中でよく転びそうになる。骨でも折ったら寝たきりになりかねないから、気をつけないと。
- ・息子夫婦は、自分を気にかけてくれて来てくれるが、往復の移動も大変だろうに、申し訳ない。
- ・買い物や病院通いで町に行きたくても、バスは少ないし乗降も大変だ。
- ・自分が急病で倒れたとき早く病院に連れて行ってもらえるのだろうか。大きな病院は遠い。
- ・地域には、自分のような年寄りだけとなり、空き家も多い。
- ・自分の介護で迷惑をかけさせたくない。ケア付きの住まいとかがあるといいのに。

### 【D夫さん 地方都市在住の18歳】

- ・この町はさびれているけど、自分の生まれた町だから愛着がある。ここで働きたい、できれば安定した形で。でも、そもそも働く場所がない。工場だって、景気がものすごく悪くなっている今時、新たに来られるところはなかなかないだろう。

ここで描かれた生活風景は、多くの人々の不安や不満を示すほんの一例である。そこからは、私たちはより良い暮らしに向けた思いを持ちながらも、社会で働きつつ家族生活を満足に送れなかったり、第一線を退いた後に余生を安心して過ごせなかったりするなど、ある種、社会生活を送るにあたって当然に期待していたことについて、実現が困難である様子がうかがわれる。さらに、急速に厳しくなる経済社会情勢に直面し、将来への不安も大きい。

国土交通省では、暮らしにおける多様な不満や不安を解消して暮らしを支える取組みを行っている。もとより国土交通省だけで全ての問題が解決できるわけではなく、国土交通省を含めた政府全体で、幅広い関係者とともに、国民の暮らしのために日々努力しているところである。以下、第1章では、暮らしにおける不満や不安等の意識の動向と、これを取り巻く環境について分析し課題を抽出し、第2章では、国土交通省としての取組みを中心に記述を行う。